一般教育総合コース

学問のあゆみ

1972年度

お茶の水女子大学
平成
28.3.10
受贈
附属図書館

お茶の水女子大学

目　　次

「学問のあゆみ」序説……堤　精二　1頁

第一講　家族の普遍的認識をめぐって……湯沢雍彦　2頁

第二講　霊長類研究のあゆみ……浅見千鶴子　3頁

第三講　芸術史理解の変貌……谷田閲次　4頁

第四講　高分子合成化学のあゆみ……中島利誠　5頁

……細矢治夫　5頁

第五講　確率論の現代化へのあゆみ……竹内順治　6頁

第六講　物理学者の原型－パスカルの場合－……亀井　理　7頁

第七講　国語研究のあゆみ……江湖山恒明　8頁

第八講　日本における救貧制度のあゆみ……小川政亮　9頁

第九講　日本における微生物工業の発達について……五十嵐　脩　10頁

第十講　日本古代史研究の過去と現在……青木和夫　11頁

第十一講　教育学のあゆみ……吉田　昇　12頁

第十二講　社会科学の基礎理論としての経済学の成立……柴垣和夫　13頁

講義日程……14頁

総合コース『学問のあゆみ』序説

1956年に始められた本学の総合コースは本年で17回目を迎える。開設当初を顧ると、いまさらながら随分長い時間が経ったものだという感が深い。この17年の間にいく度かの試行錯誤を繰り返しつつ、本学独自の、大学教育における新しい形態を作り上げて来た訳である。そして、今日なお、この総合コースには解決しなければならない諸問題を蔵してはいる。この点に関しては、今後とも教官と学生が英智を傾け、一致して改善の努力を続けなければならないであろう。しかしながら総合コースの理念である、広い視野に立って物事の根源を見すえる眼を養うことは、かなりの効果を生んでいると思われる。最近他大学で本学の試みに多くの関心が示され、各大学それぞれに独自の方法で、総合コースの実行に着手しているし、また、文部省でも二年前に示された一般教育の改正に際して、総合コースの形態を大幅に取り入れている。これらは長い時間をかけて教官と学生が一体となって育ててきた、本学の総合コースの成果が認識されてきたものといいうるであろう。

さて、本年度のテーマは題して「学問のあゆみ」という。第二次世界大戦後の学問は飛躍的な発展を遂げたといわれる。そこには、かって考えられなかったような新しい学問分野が開拓され、一方、専門領域は極度に細分化されつつある。一体、学問とは何なのであろうか。天動説の時代に提起された地動説は単なるdogmaでしかなかった。いま世界に誇りうる日本の古典「源氏物語」は江戸時代では人心を迷わす好色の書と評価されていた。時の流れに従って学問は進化発展する。現在の学問の到達点もやがては否定し、乗り越えられて行くであろう。この一年各講師の講義を通して「学問とはなにか」ということに新たな関心と、新しい問題の発見を試みてもらいたい。そのためにも、受講する前に、是非とも自らの手によって充分な検討を加え、根深い問題意識を用意されんことを切望してやまない。

堤　精二

第一講　家族の普遍的認識をめぐって

湯沢雍彦

「家族」を事例的にではなく、普遍的・通文化的にとらえて一般化をはかろうとする科学者の試みは遠くギリシヤの昔から存在したが、中でも19世紀後半に明確な「発展段階説」を大胆に提示したモルガンの学説は、一世をふうびした。それは20世紀の人類学者に完膚なきまでに否定されながらも、マルキシズムの中では主要な古典となって生き残り、現代での再評価も少なくない。なぜ、家族という平凡な対象についても非常に異った学説が対立することになるのかを、モルガンの場合を中心に考察してみたい。

参考書

L.H.Morgan,Ancient Society, 1877.

（「古代社会」岩波・角川・改造各文庫に飜訳あり）

F.Engels,Der Ursprung der Familie,des Privateigentums und des Staats 1884.1891.

（西雅雄訳）「家族・私有財産及び国家の起源」岩波文庫

E.A.Westermarck,The History of Human Marriage,1891.1921.

江守五夫訳「人類婚姻史」社会思想社

山室周平「家族の歴史的発展」『講座社会学第4巻』東大出版会

山根常男「キブツ――その社会学的分析」誠信書房

青山道夫「家族学説の諸問題」『続近代家族法の研究』有斐閣

第二講　霊長類研究のあゆみ

浅見千鶴子

霊長類（Primate）はヒトおよびサルと呼ばれる仲間の総称であって，哺乳類の進化の中で特殊な位置を占めている。最初は原始的な食虫類から分れたもので、哺乳類としての原始的な形を今日でも多くのこしているが、大脳の著しい発達に進化の方向があり、ヒトはその頂点に位置し、優れた知力によって文化を創り上げ全地球を支配するに至った。

ヒトに最も近縁のサルたちを研究することはそれ自体真に興味深いものであり、同時にヒトの理解を深めるために必須のものであるにも拘らず、長年不毛のまゝに放置された。戦後間もない1952年京大霊長類研究グループによって幸島のサルの餌づけが成功し、それまで不明だったニホンザルの生態・社会・行動等が明らかにされた。これを皮切りに日本ザルの研究が一気に進み、欧米では約10年遅れたが、資力に物をいわせて大規模な霊長類の研究が着々と進行し、成果をあげ、大きな霊長類研究所がアメリカで7カ所も設立された。我が国でも近年、海外調査団が作られ、アフリカ・東南アジア・南米等へ出かけかなりの成果を得つつある。これらのサル研究について心理学の立場からその歩みを眺めたい。

参考文献

伊谷純一郎、高崎山のサル（日本動物記２）　思索社

伊谷純一郎・徳田喜三郎、幸島のサル（日本動物記３）　思索社

河合雅雄、ニホンザルの生態　河出書房

川村俊蔵・伊谷純一郎編、サル、社会学的研究　中央公論社

シャラー著・小原秀雄訳、ゴリラの季節　早川書房

Goodall,Shadow of man（河合雅雄飜訳中）

第三講　芸術史理解の変貌

谷田閲次

芸術、特に造形美術の歴史についての理解と省察に関して、その近代における変化と展開を説くこととしたい。ここで扱うのは芸術史の内部における研究の問題ではなく、芸術の歴史をいかに考え理解するかの問題である。それには近代美学の立場が関連して来るので、時間の許す限りそれについての易しい解説を加えるが、主眼は芸術史の展開を能力の実現と見る見方から意志の実現と見る見方への変革、その意志の多様性の把握から類型論的理解の成立へ、芸術史における様式概念の深化へと結ばれて行く道程をたどってみたい。

参考書として、

Herbert Read ,The meaning of Art. は平易な入門書として有用である。原書はPelican Book として入手し易く、邦訳もある。

また、より基本的なものとしてWilhelm Worringer, Abstraktion und Einfühlung. がある。前掲のRead の所論にもWorringer の影響が大きい。この書は草薙正夫氏の邦訳「抽象と感情移入」（岩波文庫）がある。

第四講　高分子合成化学のあゆみ

中島利誠

偶然の発見、経験を基にして発達した繊維・ゴム・プラスチック工業技術から学問としての高分子合成化学が誕生して来た過程、関連学問分野・関連工業に与え、また、受けた影響、現状と将来にかたる問題意識の推移を考察し、高分子合成化学が外界からのニーズと内部に蓄積されたエネルギーのはけ口の２つを原動力として発展して来た過程を述べ、純正科学と応用科学の視点の違いまで言及したい。

参　考　書

永井・神原「高分子物語」中公新書
林雄二郎「日本の化学工業」岩波新書
桜田一郎「高分子化学とともに」紀伊国屋新書
祖父江・和田野・井本「未来の高分子の世界」ダイヤモンド社
C.S.マーベル「高分子の有機化学」東京化学同人（現代化学シリーズ）
高分子学会「高分子の分子設計」高分子学会
三枝・大津・東村「講座　重合反応論」化学同人

第五講　確率論の現代化へのあゆみ

竹　内　順　治

確率論は自然界および人間社会に数多く見いだされる偶然現象を解析することを目標とする数学の一部門である。17 世紀中葉、パスカルによってこのような解析が着手され、19 世紀初めにラプラスによって集大成された。これが古典的な確率論であり、その組合せ的理論が高等学校の「数学Ⅲ」で教授されているわけである。しかし、ラプラスの立場は、いくつかの欠陥があり、適用できる範囲も限定されたものであった。確率論の現代的な衣がえには、さらに100 年以上の歳月を要し、1933 年ソ連の数学者コルモゴロフによってなしとげられたが、それには統計力学からの刺激、ルベグ測度論の完成、ヒルベルトの公理主義の思想などの誘因があって始めてなしえたのである。

参考図書

赤・前原・村田編　数学のすすめ　筑摩書房

コルモゴロフ訳 根本・一条　確率論の基礎概念　東京図書

遠山　啓　数学入門（下）　岩波新書

ブルバキ　数学史　東京図書

第六講　物理学者の原型

—パスカルの場合—

亀　井　　理

今日いうところの物理、あるいはそれを担う人々の原型が形作られたのは17 世紀の西欧である。その考えのたて方や行動様式の特徴をよく示しているパスカルについて話したい。

1. 17 世紀の前半はフランスの内外にわたる戦乱・農民一揆の時代であった。それでまず彼の生涯（ 1623 − 1662 ）をたどることによって、多方面にわたる仕事と時代とのかかわり方をあとづけてみよう。
2. パスカルの考えと行動の中から　a）自然に関する学説の真為は実験によってのみ判定される。b）科学上の業績に伴う名誉は個人の財産である。c）科学者は支配者でもないが人民でもない。d）科学は万能ではないなどの論点をとりあげる。これは出身階層の社会意識との関連でみるとき一層はっきりするだろう。

この原型は現在にいたるまであまり変っていない。

参　考　書

手頃な伝記としては

J．メナール「パスカル」（みすず書房　1971 年）。

思想史にひとつの座標を設定した

L．ゴルドマン「人間の科学と哲学」（岩波新書　1959 年）。

日本語訳全集・全3巻のうちとくに

「パスカル全集」第1巻（人文書院　1959 年）。

第七講　国語研究のあゆみ

江湖山　恒　明

国学者平田篤胤の著書の内容に対する解説・批判を通じ、主として国語研究の進展情況を話すつもり。そしてできれば具体例に即して、学問の本質や学者の在り方にも触れてみたい。

テキスト・参考書

共に不要。

1. ただし参考文献をどうしても読んでみたいという人のために、主な物を挙げれば次のとおり。

篤　　胤	神字日文傳
泮　　信　友	假字本末
落　合　直　澄	日本古代文字考
本　居　宣　長	古事記傳（總論）
橋　本　進　吉	古代國語の音韻に就いて

第八講　日本における救貧制度のあゆみ

小　川　政　亮
（日本社会事業大学教授）

欧米では17世紀から発達した貧困者救護の制度も、わが国では昭和初頭に至るまで、きわめて不完全な恤救（ジュツキュウ）規則をみるにすぎなかった。昭和7年の救護法、同12年の母子保護法も慈恵的なものであり、権利としての生活保障はようやく現行憲法に規定されたものの、その真の実現にはほど遠いものがある。この間、日本の法学者はどのような批判や提言を行ない、行政庁はどのような論理でそれらを受容ないし拒絶してきたかを、具体例に則して考察してみたい。

参　考　書

小川政亮『権利としての社会保障』頸草書房

小川・蓼沼編『岩波講座・現代法10巻』所収の各論文　岩波書店

吉田久一『日本の救貧制度』頸草書房

第九講　日本における微生物工業の発達について

五十嵐　　修

わが国においては微生物を利用したいろいろな産業が発達している。この産業の基盤を考えると、わが国における清酒・醤油・味噌などの醸造業が基礎となり、これらについての科学的研究の進歩が、今日の微生物利用工業の発達に大きな役割を果したと考えられる。このことは、欧州においても、パスツールのブドウ酒醸造における酵母の発見、発酵の研究から、生化学の基礎が築かれていったのと同様であろう。このような観点から、日本における微生物利用の発展、今後の課題などについて述べてみたい。

第十講　日本古代史研究の過去と現在

青　木　和　夫

学問の研究分野は時代とともに細分化してゆく傾向がある。日本史学の場合、明治・大正までは原始古代から近代まで、各研究者はひろくこれを自己し研究領域に包括するのが一般であり、時には歴史学全般についても所見を著述する巨きなスケールの研究者も出たが、ほぼ昭和初年から古代史・中世史・近世史・近現代史と分化しはじめ、思想史・考古学・民俗学などの諸分野もそれぞれ専門領域として独立するにいたった。

このような状況は、学問発展の必然的結果とはいえ、自然科学のように実生活に対する直接的な効用を持たぬ人文・社会系諸科学にあっては、自分は何のために学問をやっているのか、自分の学問はいったい何の役に立つのかという自己の生き方ないしレエゾンデェトルに関わる深刻な疑問を各研究者によび起さずにはいないのである。

私は日本古代史を専攻する者の一人として、自分の専攻分野の過去と現在を紹介するとともに、上述の根本問題について此の際改めて考え直してみたいと思う。

参　考　書

マックス・ウェーバー　職業としての学問　岩波文庫

日本史研究入門　I　東京大学出版会

岩波講座　日本歴史　別巻　岩波書店

第十一講　教育学のあゆみ

吉田　昇

教育学は教育現象を明らかにしようとする学問である。教育現象は歴史的社会的条件のもとで、意図的な働きかけを通じて人間の発達を促そうとするもので、それ自身きわめて複雑な性格をもっている。その複雑さを反映して教育学も、その視点や立場の領域によって、さまざまな種類に分れている。しかし、20世紀に入ってからの主な流れは、それ以前の観念的な理念の追求から、社会的基底の強調、実証的研究の尊重へと重点を移行させてきた。このことは教育学の拠って立つ共通基盤を拡大することに貢献した。しかし、それだからといって、教育学の研究法が全く一致したわけではない。実践や価値の問題と深くかかわっている教育学の研究は一方で実証性を重視しながら、他方ではつねに人間の発達の課題を追い求めていくという性格をもち、つねに教育とはなにかという課題を反省し続けているといってよい。

参考文献

宗像誠也	教育研究法	昭和28年	河出書房
教育学全集Ⅰ	教育学の理論	昭和42年	小学館
細谷俊夫・仲　新	教育学研究入門	昭和43年	東大出版会
海後宗臣	教育学五十年	昭和46年	評論社

第十二講　社会科学の基礎理論としての経済学の成立

東京大学助教授　柴垣和夫

第1日　経済学の生誕

商品経済の発達、資本主義の生成とともに、経済学が発生する。しかし、それは、初期には絶対王政や初期ブルジョア国家の経済政策と結びついた政治経済学として、イデオロギー的制約をうけていた。それがどのようにして、対象の客観的把握をめざす科学としての内容をそなえていったか。この点を、とくに古典派経済学を代表するA・スミス，D・リカードの経済学にそくして解明したい。

第2日　『資本論』の成立とその体系

古典派経済学の集大成たるリカードの学説も、なお資本主義社会を歴史的なるものとして把握しえない限界を残していた。その点を克服したのがK・マルクスの『資本論』であるが、『資本論』はしばしば誤解されているように、たんなる社会主義イデオロギーの聖典ではない。それは何人も承認せざるをえない資本主義社会の理論的分析の書であって、その点を唯物史観の形成とのかかわりで解明し、ひいてはそれが、社会科学の最終目標である現代社会の把握に、いかなる意味で役立つかを明らかにしたい。

〔参考文献〕

1. 大内・戸原・大内『経済学概論』（東大出版会）第二篇第一章。
2. 宇野弘蔵『資本論の経済学』（岩波新書）
3. 宇野弘蔵『資本論入門』（青木書店）
4. レーニン『カール・マルクス』（各種文庫本）

講　義　日　程

（講議日時＝土曜日第三・第四時限 10：20〜12：00）

月	日	系列	担当講師	月	日	系列	担当講師
4	22	序説	堤　教授	11	4	人文	江湖山　教授
5	6	社会	湯沢　助教授		18	〃	〃
	13	〃	〃		25	社会	小川　非常勤講師
	20	人文	浅見　教授	12	2	〃	〃
	27	〃	〃		9	自然	五十嵐　助教授
6	3	人文	谷田　教授		16	〃	〃
	10	〃	〃		23	社会	青木　教授
	17	自然	中島　助教授	1	13	〃	〃
	24	〃	細矢　助教授		20	人文	吉田　教授
7	1		ゼミナール		27	〃	〃
9	16	自然	竹内　助教授	2	3	社会	柴垣　非常勤講師
	30	〃	〃		10	〃	〃
10	21	自然	亀井　講師		17		ゼミナール
	28	〃	〃		24		試験

総　合　コ　ー　ス

学問のあゆみ　谷田・江潮山・吉田昇・浅見（人文関係）
青木・湯沢・柴垣・小川　（社会　〃　）
中島・竹内・五十嵐・亀井　（自然　〃　）
細矢

一般教育関係科目の各分野にわたる共通な一つの主題について、総合的に学ぶものである。

主として二年生対象。

履修単位数：同一年度において4単位まで履修可能で、二年度までの計8単位が一般教育科目の基礎単位として数えられるが、一分野については4単位をこえてはならない。

セミナー：総合コースの成果をあげるため前・後期、各1〜2回程度セミナーを行なう。

試験方法：学年度末に試験が行なわれるが、その際各担当講師から試験問題が示され、学生はそのなかから受験科目をきめる。
三分野のうちいずれの分野の科目を受験することも自由であるが、一分野について2単位まで、全体で計4単位を取得限度としている。